

東ティモールニュース

EAST TIMOR NEWS No.8

2002年3月21日



↑ボボナロ温泉

エルメラ県の西隣りにボボナロ県があります。そこに温泉が湧いていて、湯船が作られています。硫黄泉で、湯船での湯温は、43度Cは、あるでしょうか。とても気持ちよく浸かりました。源泉からU字溝でお湯を引き、途中から、湯船用と洗い用に分流させてありました。洗い用は、傾斜を利用した落差が2mから1mくらいまで10数段階分けて流れ落ちるようにしてありました。湯船は、少しずつ温度の違う三槽に分けられており、更に最下段には20m x 5mの温水プールが作られていました。深いところで5m浅いところで80cm位でした。青年達が泳いでいたので、一緒に泳ぎましたが、疲れしました。東ティモールの秘湯を一度はお尋ね下さい。

本年5月20日の主権回復記念日に向けて、各県からの演し物の練習が始まりました。各県内で、競い合い、一団体が選出されます。エルメラでも練習が始まりました。銅鑼と小鼓の演奏に、舞踊が加わります。練習だけでも相当ハードです。併し、三ヶ月先に向けて、真剣な眼差しと長老の助言が怠惰を赦しません。小鼓は、竹の根元の次第に太くなって行くところを利用して、山羊皮を張ります。左肩から下げて、脇に挟み、両手を使ってリズムを刻みます。銅鑼には、直径の違う幾つかの種類が有りますが、大体は直径30cm位です。中心が凸状になっています。中心を叩く人と、辺縁を叩く人とがいます。舞踊は、何かを象徴しているようですが、生憎詳しく尋ねられる程の語学力が、小生には、有りません。黙想。

エルメラ県保健局長が、フィジーにある大学に留学することになりました。もともとは、インドネシアの歯学部にて勉強していたのですが、その半ばで、東ティモールエルメラ県の保健局を立ち上げる役割を担いました。ここに到って、その業務が軌道に乗ったと考えられたのかどうかは、定かではありませんが、勉強の継続を決断しました。日本でも、明治維新の折、行政を担うべき人が陸続と西洋に留学に出たと聞いています。将来の国作りへの展望や専門技術の獲得に励んで貰いたいと思います。留守を守る側、将来を担う者共に大変な努力が必要ですが、明確な希望に燃えていることには変わり有りません。羨ましい限りです。光栄ながら、保健局長ルシオ氏の引継ぎ・離任式に参加させて戴きました。昨年8月以来、共に働いて来ましたので、感慨深きものがあります。東ティモール全体で、歯科医は、何人も居ないと思われれます。帰国しての活躍を祈ります。

2月は、本当に雨が沢山降りました。太陽が見えない日が殆どでした。洗濯物は、乾かず、猫のトイレも乾かせない日が多くありました。村村への道は、それは、もう大変。それでなくとも狭い道幅が、車の幅とほぼ同じくなくなってしまう所がそこかしこ。川の水量も増え、流石の四駆でも行くことを躊躇うことばかり、でも行かなくては仕事になりませんから、行け行けどんどん小池屋です。帰れるか帰れないかは、帰り道に考えるという思考回路が完璧に出来上がりました。それでも今の所は、帰って来ています。道が崩れては、直すの繰り返し。そんな時期が終る頃調度良く、親方日の丸がやって来る予定です。道路修理のため村に一人で住み込んで働いているタイ人に会いました。既に一年半以上いるそうです。ご苦労様です。

東アフリカにあるウガンダ共和国に行ってきました。約3年住んだ所です。人口2,200万人。1962年に独立するまでは、英国の保護国でした。そのこともあって公用語には、ウガンダ語、スワヒリ語と共に英語が入っています。英語力があるため英国や米国への出稼ぎ者が多く、外貨収入の25%をその仕送りが占めているそうです。東ティモールでも、公用語をどうするか議論がなされています。ポルトガル語を推薦する勢力が優勢です。地元の言葉、テトゥン語は、未成熟で誤解してしまうことも多く、又概念語が少なくこれから育てなければなりません。併し、何故今更ポルトガル語なのか、それならいっそのこと英語にしたらどうかという意見もあります。海外留学する場合にも便利です。

ウガンダは、赤道直下の国です。前々から気になっていて遂に確かめられなかった事を今回は、確かめられました。湯船の栓を抜いた時など日本では、水が抜けるに連れ、時計回りに渦が巻きます。赤道直下（0度）に行き、そこで実験をしました。緯度0度の地点では、水は渦を巻くことなく、真下に流れ落ちます。そこから以北（2メートル位）では、時計回りに渦が巻き、以南（矢張り2メートル位）では、時計回りとは、反対に渦が巻きました。

ウガンダには、エイズにより両親を亡くした娘達を引き取り看護婦或いは、助産婦に要請する学校始めた引退した看護婦さんがおります。ここは今では、生徒数が60名近くになっています。保護者もおり、学費が払える生徒も増えましたが、まだまだ運営は困難です。この学校のあるムコノ県には、同様の養成所は、ありません。県保健局も、此処が立派になることを望んでいます。資金援助はありません。病院を併設して、自らの場所で実習ができるよう薦めるのみです。手術ができるような病院は、各県に一箇所あるかないかです。この学校は、セント・エリザベス看護婦助産婦養成学校と言います。日本にある「ERADDE・UGANDA」という小さな団体が細々と応援しています。皆様の協力も大歓迎です。

ウガンダでは、医療従事者の要請は、急がれているため、各郡にある保健所には、3年間で看護師以上医者以下の勉強を終えた医務次官が配属されています。勿論国立大学には、医学部もありますが、医者の養成には、長期間を必要としますので、その隙間を埋める一つの選択肢としては、興味ある制度です。東ティモールでも、同様な状況ですから、この制度は、一考の余地があるような気がします。

東ティモールの人口は、約80万人、ウガンダ・ムコノ県の人口が約82万人。どうしても比較してしまいます。食糧事情は、東ティモールの方が豊かです。社会システムは、ウガンダの方がより確立されています。日用雑貨は、どちらも似たようなもので、中国や東南アジアの製品が主となっています。ウガンダはアフリカ大陸の内陸国、東ティモールは、海に囲まれた島。共に珈琲産地。ウガンダは、英国保護国から1962年に独立の後独裁政権が続き内乱に明け暮れ、1995年に実質的に初の民主的大統領選挙が実施されました。東ティモールは、ポルトガル植民地から1975年に独立するも、直ちにインドネシアに占領され独立闘争の末1999年国民の直接投票の結果国際世界が関与することとなり、2002年4月の大統領選挙を迎えようとしています。平均寿命は、乳幼児死亡率が高いことも有り、共に40歳代前半。

被植民地国等においては、旧宗主国の政策の違いが生活基盤作りの差異をもたらしていることもさりながら、その後の国際社会との政治経済社会関係において、富の公正な分配がなされず、いろいろな形で搾取され続けたことが現在の貧しさに結果しているのです。富の偏りは、個々人の「勤労努力の結果」という単純な理由からではありません。実際に、ウガンダにしる東ティモールにしる、人々の労働時間は、長時間で厳しいものです。逆に日本では、週40時間労働となり、EUでは、週36時間労働などとなりつつあります。何故そんな労働時間で、家や車が買えたり、海外旅行が気軽にできたりするのでしょうか。私達に分まで余分に働いている人々が居なければ、有り得ないことではないでしょうか。

苦痛にはいろいろあります。幸福にもいろいろあります。考えてみれば、きっと半々なのでしょうが、どうしても苦痛の方が多く感じています。昔「少女ポリアンナ」は、聖書の中の「苦痛」という単語と「幸福」という単語の数を数えたそうです。そんな気持ちも解ります。太陽の光、咲き誇る花、無邪気な動物達、静謐な岩、山、柔軟な草木、爽やかな空気、広大な宇宙。そしていがみ合う人類。視点によっては、幸福の方が多そうです。人間の問題は、人間が努力するしかなさそうです。

主権回復記念日に向けた行事の一つに、バレーボール大会があります。現在各郡の対抗戦が開催されています。男女それぞれ一チームが4月26日の県大会に参戦します。全国大会は、日程が決まっていますが、5月の相応しい日ということになるのでしょうか。男子チームでは、グレン保健所チーム「UNIVERS」が、郡優勝を果たしました。緊張感溢れる技術の高い試合でした。思わず参加したくなってしまいました。いい汗です。

縷紅荘主人
高塚政生 記